

メキシコ先住民文化の研究

寄稿

稿

複眼的な文化の理解へ

文学部准教授

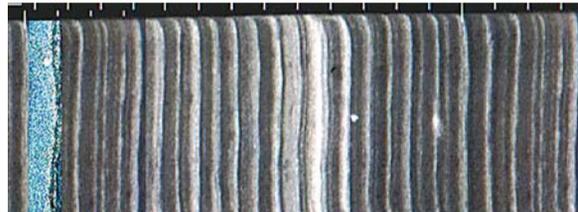
井上幸孝

共同研究「環太平洋の環境文明史」(文部科学省平成21年度、25年度科学研究費補助金(新学術領域研究)採択・研究代表)井上城大学・青山和夫教授のメンバーの一人で、メキシコ先住民の歴史を研究する井上幸孝文学部准教授に寄稿していただいた。

人類の共生に不可欠 多様な解釈で事実をみつめる

私が専門分野として研究しているのは、メキシコ先住民の歴史です。アステカ文明を築いた人々がスペインに征服された後、ヨーロッパ文化との接触を通してどのような文化を育んできたのかを主に調べています。ふだん私たちは、アステカ文明を含む古代アメリカの先住民文明にどこか幻想的イメージを抱き、「謎」とか「神秘」とかいった言葉のベールに包んで、あたかも「大航海時代」の到来によってそれらの人々が、滅び去ったかのような印象を持ってしまっています。けれども、実際にはアステカやマヤ(これら北中米の諸文化はメソアメリカという文明圏に属します)も、そして南米ではインカなどの人々(アンデス文明)も、ヨーロッパ人と出会うまで数千年にわたって独自の文明を築き、発展させてきたことを忘れてはいけません。現地にフィールドワークに行く機会もありませんが、大部分は机に向かっている状態で、現地の文書館に通ったりするというのが、根拠のある作業です。これらの文書を少しずつ読み解きながら、先住民の思考を明らかにすることによって、彼らがいかに独自の文化を保っていたか、その時々々の社会の状況に応じてそれを自在に変容させてきたのかを知らなければなりません。ただ過去に起こった出来事や事実関係を明らかにするのは、主観的な文化の創造・再創造のプロセスを解明するというのが研究の大きな目的です。

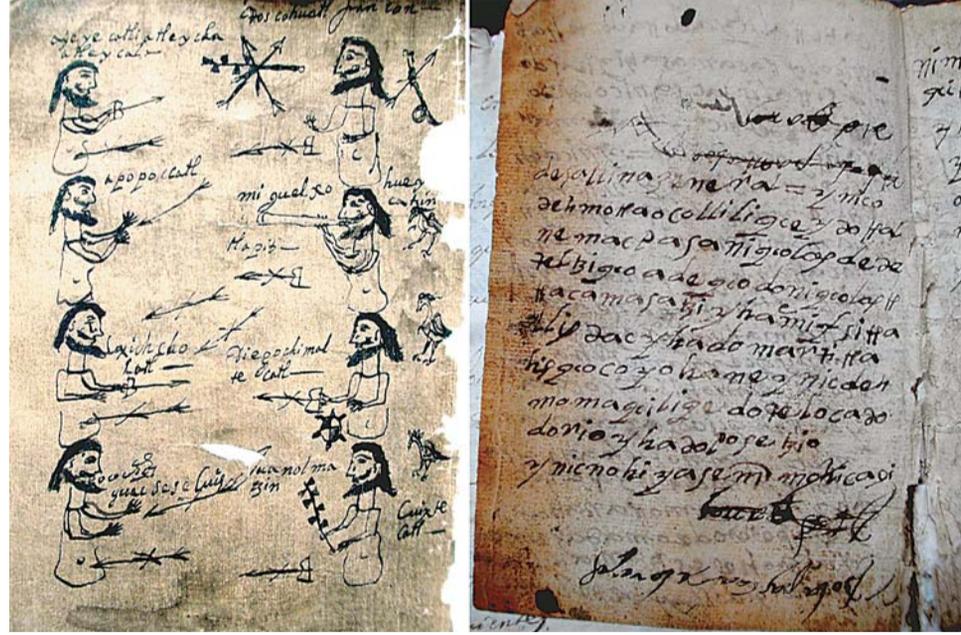
現代社会には情報が氾濫しています。私たちはそれらの情報一つひとつを、鵜呑みにすることなく、正しく読み解き、適切に理解する必要性を迫られています。遠く離れたメキシコの先住民文化を研究対象にしていくには、西洋人の眼鏡を通してしか彼ら先住民の文化を理解できなかったり、ヨーロッパ人が解釈した情報を引き写してきて彼らを理解したつもりになるのはいけないと感じています。



▲メキシコ市中心部のテンプロ・マヨール遺跡(アステカの中心都市跡)で井上准教授(上)。下は年稿の拡大写真とそこから明らかになる気温の変化

同じことを現代社会でやったら、優勢な潮流に乗って主体的な判断を放棄することになってしまいます。特定の観点でしか物事を見られないというのではなく、複眼的に相手や他者をみようと努力し、結果、地球上の異なる人間集団同士が理解しあえる心をもつことで、人類に未来があるのだと思います。相手への誤解をたくさん抱え込んだまま、一方的な情報に流されたままでは、異文化理解も多文化共生社会の到来もあつたものではありません。地味に見える私たち人文系の学問は、短期的に見れば、しばしば目に見えない形で利潤も経済的効果も生み出さない性質のもので、けれども、長期的な観点からすれば、人間社会の根幹に大きく関与するもので、人類の共生に不可欠なものだと確信しています。

きく関与するもので、人類の共生に不可欠なものだと確信しています。言葉で、一人類の未来への投資です。その効果は、せわしない日々の人間活動とは別のリズムで、10年、20年、あるいはそれ以上の時間的間隔で人々の間に浸透し、社会への影響となって現れてくるものです。狭い視野で物事を見るのではなく、広く人々がわかり



▲ 植民地時代のメキシコ先住民の文書

「環太平洋の環境文明史」 文部科学省の共同研究に

即効性のある研究が重宝される時代ではありませんが、幸いなことに、昨年度(平成21年度)から文部科学省・科学研究費補助金(新学術領域研究)の共同研究として、「環太平洋の環境文明史」が採択されました。人文社会系の研究課題としては、昨年度国内で唯一の採用でした。「環太平洋の環境文明史」は、アステカやマヤを含む北中米の「メソアメリカ」、南米の「アンデス」、さらには「西太平洋島嶼(琉球)」、「東南アジア」、「オセアニア」といった環太平洋地域の文明の盛衰を明らかにし、既存の学問分野に収まらない新たな歴史学的枠組みを構築しようというもので、5年がかりの一大プロジェクトです。30人ほどの研究者が複数の研究班に分かれて調査・研究を進めていて、メキシコ(アステカ)先住民文化を専門とする私もこのプロジェクトの中で青山教授を中心とする「メソアメリカ研究班」(A02班)に参加しています。

この研究プロジェクトの特色の一つは、「年稿」という、毎年花粉やその他の物質が積み重なっていくことによってできた湖沼堆積物によって地球規模の環境史を解明しようという点です。ボーリングによって湖の底から年輪を取り出し、それらを詳しく分析することによって、未来への指針となる新たな知の枠組みのもとになる文明観を生み出すという点です。

専修大学では本年4月に文学部が再編されて7学科編成となり、新たに「人文・ジャーナリズム学科」が誕生しました。この学科の中には、「東西文化」・「生涯学習」・「ジャーナリズム」という3つのコース(2年次から選択したコースを履修)が置かれていますが、私が所属するのは「東西文化」コースです。私は「中南米の文化と歴史」や「文明の衝突と融合」といった講義や、中南米文化に関する演習などの科目を担当することになっていました。外国文化について学ぶ「東西文化」、地域社会に根ざした「生涯学習」、報道やマスコミに関わる「ジャーナリズム」の各コースは、一見それぞれが違つ方向を向いているように見えるかもしれませんが、これらも、実は、他者との理解を深め、特定の見方に流されることなく物事を見極めるという点で重要な問題意識を共有しています。これこそ、現代社会を生き抜いていく上で、また、地域社会や国際舞台といったそれぞれの場で活躍する際に、これからの若い方々に必要とされている重要なスキルだと考えています。学科自体はまだこの4月に第一期生を受け入れたばかりですが、順調なすべり出しを見せ、新入生たちは意欲的にさまざまな課題に取り組んでくれています。現代社会を生き抜いていく上で、欠かさない知識と経験を積み重ねた卒業生が専修大学を巣立っていく日を、学科の教員一同、今から心待ちにしています。

文学部の新学科「人文・ジャーナリズム」始動

専修大学では本年4月に文学部が再編されて7学科編成となり、新たに「人文・ジャーナリズム学科」が誕生しました。この学科の中には、「東西文化」・「生涯学習」・「ジャーナリズム」という3つのコース(2年次から選択したコースを履修)が置かれていますが、私が所属するのは「東西文化」コースです。